

# おいでん・さんそんSHOW 12月号

2017.12.01発行



特集 第6回 いなかとまちの文化祭開催  
いなかが暮らしの豊かさを提案



矢作川水族館ブースのコリントゲーム「わくわく!ドキドキ!矢作川くんだり」。ビー玉がくぎに当たりながら、矢作川の上流～下流～海まで旅をする。



(上)自家採取のはちみつを試食する様子  
(下)子どもたちも多く参加した



(上)足助地区五反田の棒の手披露  
(下)ヤギを運れた参加者もいた

KITARAオープニングイベントとの相乗効果で  
終日賑わう  
11月25日(土)、T・FACE 1階シテイプラザとペDESTリアンデッキを会場に、今年で第6回目となる「いなかとまちの文化祭」が開催され、多くの方にご来場いただきました。  
いなかとまちの文化祭は、まちの中で自然の営みについて感じられる暮らし方、地域とつながる暮らし方、様々な暮らしの豊かさについて提案する取組です。  
体験では、豊田の森から切り出した木材を使ったミニツリー作りやオブジェ作り、木のおもちゃのワークショップも行われ、会場内では、地元農家の新鮮野菜、お菓子、手仕事による小物やジビエを使った料理など、出店者の方の暮らしの豊かさを、見て、嗅いで、触って、味わって感じる数々の商品が販売されました。  
豊田市の個人有志が中心となったいなかとまち文化祭実行委員会が主催しています。  
会場内では、地元農家の新鮮野菜、お菓子、手仕事による小物やジビエを使った料理など、出店者の方の暮らしの豊かさを、見て、嗅いで、触って、味わって感じる数々の商品が販売されました。

2017 第8回 縦系と横系  
「縦の糸はあなた、横の糸はわたし。織りなす布は、いつか誰かを暖めるかもしれない。」中島みゆきさんのヒット曲「糸」の1節だ。

## センター長のミライのフツツに 向かって!



島根大学の作野広和教授は、縦の糸を行政、横の糸をコミュニティに例え、紡ぐための人づくり、組織づくりなどによって行政と住民の「協働」は進められ、行政と住民をつなぐ専門的な能力を備えたNPOなどの中

間支援組織が「斜めの糸」を通すことで持続可能な地域づくりができる」と説いておられる。「斜めの糸」であるおいでん・さんそんセンターの立ち位置を含めともも理解しやすい例えである。  
豊田市は、平成の合併に際し豊田市まちづくり基本条例を制定し、「共働(市と住民が対等の立場で自治体経営を共に推進することを意図した独自の表現)の推進、都市内分権の推進、地域

自治区の設置など時代を先取りした先進的な取組みを進めてきた。高度経済成長とともに合理化、分業化が進み社会課題の解決が行政任せの時代から自治復権への一歩と言える。  
一方、全国では、人口減少、高齢化に伴う社会課題が山積する山村地域を中心に、住民自らが地域経営を行う「地域運営組織」が生まれている。山形県川西町では、地区全戸加入のNPO法

人まで誕生している。豊田でも、旭地区敷島自治区や下山区和合自治区が「自治区ビジョン」を策定し自立的な地域運営を進めている。  
縦系を行政、横系をコミュニティとする自治のあり方が問われている。縦系は地域運営組織、横系はテーマ別の運動体、行政は黒子という時代がすぐそこに来ているように思う。

## イベント情報

### プレおばらマルシェ

●日時:2017年12月10日(日)9:00~15:00※小雨決行 ●参加費:無料 ●場所:四季桜公園(豊田市小原町内) ●内容:【ライブパフォーマンス(出演者)】10:00和紙のふるさと太鼓/10:30山里合唱団「こだま」/11:00大道芸人「たっちゃん」/13:00フォークソンググループ「かすみ草」/13:40兄妹デュオ「華将と真澄(ハナノスケとマズミ)」【マルシェ】小原で育ったまぼろしの米「ミネアサヒ」、新鮮とれたて小原の野菜たち、小原の食材を使った炭火で焼くふつくら五平餅、小原産の大地のめぐみ自然薯、お米を使用しない野菜たっぷりのヘルシーカレー、季節の果実で作った自家製炭酸ジュース、小原産の鶏ガラから取った本格ラーメン等【クラフト・ワークショップ出店者】和紙を使った子どももできるワークショップ/日本てぬぐいやTシャツをべんがら染め体験!/自然の素材を使ったナチュラルクラフト、どんぐりに絵を描こう!/着物をリメイクした洋服、バック、小物、ポーチ!【ファミリー向け】家族で皿回し体験に挑戦!/間伐材を使ったトコ積み木/道慈小学校児童有志による「こどもマルシェ出店」!※天候などにより、出店者やイベントに変更・中止の場合があります。●問合せ:おばらマルシェ検討委員会準備会(豊田市役所小原支所内) TEL0565-65-2001 ●お知らせ:豊田市HP・小原観光協会HP・facebook(おばちゅう卒)で出店情報など随時アップします。[おばらマルシェ]で検索!



## 移住PR冊子ができました!

移住プロモーションBOOK『脈々と』を発行しました!  
車のイメージが強い豊田市ですが、実は田舎もあり脈々と受け継がれる暮らしがあります。この冊子は、中山間地域在住職員(※)6人が移住者の視点で、田舎の生き物、伝統文化、伝説、食など豊田市の魅力や意外な一面を地域住民や地域資源の取材を通じてまとめたものです。  
移住希望者などに配布し、PRしていきます。  
(※)中山間地域在住職員:豊田市中間地域に暮らしながら、地域の課題解決と活性化に取り組みするために採用された市の職員。(旭支所・足助支所・稲武支所・小原支所・下山支所に配属)



足助地区冷田小の紹介ページ 中山間地域在住職員の紹介ページ

おいでん・さんそんセンターHPでも全ページ公開中!!

表紙

REPORT

# 国際開発研究科の学生が 旭地区で発表

「空き家」、「観光」、「農」のグループに分かれて研究

11月16日(木)、旭交流館で名古屋大学大学院国際開発研究科の学生が研究発表を行いました。

同研究科では教育カリキュラムの一環として毎年、国内実地研修を行い、留学生と日本人学生が日本の地域の現状と課題を研究しています。昨年度に引き続き、今年も旭地区でフィールドワークが行われました。「まちとむらのつながりと協働発展の仕組み」というテーマのもと、①空き家問題②山村

観光の持続可能な開発③放棄農地の利用という3つのグループに分かれ、学生たちが10月16日から18日の3日間、地域住民や団体にインタビューを実施し、そのまとめを報告しました。空き家グループからは、潜在的移住者(山村移住に憧れている人)に向けた戦略の可能性や子育て世代より上の世代への空き家の供



給戦略といった斬新な提案がありました。観光グループは、持続可能な観光の観点から農業体験の拡充を提案していました。放棄農地の利用グループは、今回の調査で聞き取りをした「ターン女性の菓子工房「すぎん工房」の商品を名古屋大学の生協で販売する提案を行いました。

今回の研究で、地域の住民と学生の皆さんのつながりができ、お互いに新たな発見があったようです。(木浦幸加)

REPORT

# 滝脇自治区で 定住勉強会

坂上自治区に続いて2箇所目

11月11日(土)、松平地区で2箇所目の滝脇自治区で定住勉強会を行いました。滝脇自治区は、30世帯157人の中山間地域の小規模集落。現状のまま推移すれば2040年には人口半減、いずれ消滅に向かいます。自治区内には、明治6年開校、愛鳥活動で名高い小規模特認モデル校滝脇小学校があります。林添町、長沢町、滝脇町を学校区とする同校も、児童数は32名、存続の危機にあります。しかし、勉強会に参加した皆さんの表情は真剣そのもの、徳川の始祖松平氏の想いと歴史を引き継ぐこの地の人々は、必ず動き始めると確信しました。(鈴木辰吉)



REPORT

# てくてくの庭で二羽 ニワトリをさばいて 食べよう

参加者全員が満足と回答した

このプログラムの主催者は、旭地区に1ターンして、有機野菜と平飼い卵の販売をしているてくてく農園の横江さんです。鶏を自分の手で捌き、お肉にするという貴重な体験に、6組(大人9名、子ども6名)が参加しました。横江さんの自宅から車で5分ほどの場所に鶏舎があり約90羽が飼われています。卵を産むのは、愛知県のブランド鶏名古屋コーチン。横江さんは国産の飼料にこだわり、通常1年半くらいの飼育期間に比べはるかに長い5年ほど、愛情込めて育てています。今回、捌くのは歳をとって卵が産めなくなったメスです。鶏の習性、飼い方について説明を受けたあと、横江さんが捌く鶏を抱きながら『神聖



な感じではなく、感謝しながらも、あくまで普通のこととしてやっているし、みなさんにもそうしてほしい』とレクチャーがありました。参加者の皆さん、神妙な面持ちで横江さんが鶏の頸動脈に刃をあてる様子を見つめ、その後、初挑戦していました。(写真上)鶏の身体がまだ温かいときに、羽と皮を剥くと、いつもお店で見慣れたお肉の姿に。こちらも横江さんの実技を見てから、丁寧に部位と内臓に切り分けていました。お昼は横江さんの自宅に戻り、昼食でした。あらかじめ横江さんが捌いてあったお肉をその場で焼いてくださり、奥さんが用意してくださった名古屋コーチンのスープなども一緒に味わいました。『いただきますの本当の意味がわかった』『緊張したが丁寧に教えてくれて良かった』など、参加者の全員が満足したプログラムになりました。(木浦幸加)



シティプラザの様子 シールを集めてわなげにチャレンジし大根をゲット! 左から太田市長、新見克也さん、丹羽健司さん、洲崎燈子さん、鈴木辰吉

お子さんたちを中心に、座りこんで夢中になって遊ぶ様子を目にしました。ステージでは、山里合唱団や、書道、棒の手の演舞、日々の暮らしを歌にした音楽などが披露されました。また、福岡県の久留米市から、今も現役で動く豊田織機によって作られている久留米緋の名産品の数々をファッションショーも行いながら、ご紹介いただきました。テーマは、「山・川・まち・海 流れる、つながる、みんなの気持ち」ステージでは、「いなかとまちのシンボジウム」が行われ、山の人・丹羽健司さん(矢作川水系ボランティア協議会)、川の人・新見克也さん(矢作川水族館)、まちの人・太田稔彦さん(豊田市長)が登壇し、洲崎燈子さん(豊田市矢作川研究所)、鈴木辰吉さん(おいでん・さんそんセンター)が進行役として、トークセッションを行いました。かつて、川は物流の道として非常に重要な役割を果たしていました。矢作川には、下流から塩をはじめとする海の産物が、上流からは木材をはじめとする山の産物が運ばれていました。たくさんの土場、川港があり、挙母

のまちは、随分賑わっていたというものでした。豊田市のまちなかの発展は、矢作川の流れる中で育まれてきたともいえます。まちなかをもっと賑やかに魅力的にしていくには、それぞれの視点からの思いをお話いただきました。2000年9月の東海豪雨をきっかけに、森の健康診断を始めた丹羽さんは、「矢作川流域の人と、まちの人と一緒に活動し、科学的にみても山がおかしくなっているということがわかりました。上流と下流、いなかとまちが支え合い、もつと流域が一緒になってやっていけたら」とい思いを語られました。鮎釣り師でもある新見さんは、「川に関心が薄くなっているのを諦めるのではなく、川の魅力をみんなに伝えて、みんなが集まる場所にしていきたい。」「毎年行なっている矢作川感謝祭を、どんどん流域と海までひろげ、市民応援金なども募りながら、みんなであつなっていく、ひとつのきっかけにしていきたい。」「という思いを語られました。豊田市長は、「今現在の豊田の山を、豊田市全体をもっともつと自信と誇りを持って自慢したらいい。

「、『第三者の視点を通し、自分たちの暮らすこのまちを』なんて素晴らしいんだ」と見直す必要がある。」「という思いを語っていただきました。まちなかをよりまちらしくいなかをよりいなからしく最後に洲崎燈子さんが、「いなかとまち、それぞれの持ち味を持つて、トータルで豊田市というまちはすばらしいということになる、山をもっと魅力的に、川をもっと魅力的にすることが、豊田のまちなかをもっと魅力的にするようになる。文化祭やシティプラザのプランコ、矢作川水族館といった取り組みがあり、まちなかで山や川の魅力を発信する機会が増えてきている。山や川の魅力を感じることで、もつとみんなであつなかって、まちなかが流域の山や川、海の人たちが集う、そのセンター的なポジションで新しい出会いと発見が生まれるのではないかと思います。』と締めくくりました。



いなかとまちの文化祭の後夜祭として行われたSATURDAY NIGHT RIVER